

東京 厚生堂刊行

神教育

明治  
40 3 2  
丙交

特69

276

## 自序

西人曰く、戦争に於ける成功の四分の三は實に精神的の要素に在り、旨あるかな言や、試に思へ、我邦は叢爾たる一小國のみ、之を露國と比するに、疆土は其十分の一に至らず、民衆は其三分の一のみ、之を譬ふれば、羊を以て虎に當るが如し、成敗利鈍、較せずして明なり、然るに能く無前の全勝を得、威名を萬國に揚げ、功績を千載に垂れたる所以のもの何ぞや、是れ固より聖明の威稜と、賛翼諸將の畫策、其宜しきを得たるとに由ると雖も、抑亦我軍隊にして三千年以來養成し來れる忠勇義烈の精神あるに非ざるよりは、安んぞ能く

二  
斯の如くなるを得んや、大和魂といひ、武士道といふも、要するに此一片忠勇義烈の精神のみ、旅順の堅城は之によりて粉碎せられたり、沙河の大衆は之によりて撃破せられたり、蓋し砲銃の力や固より偉なり、炸薬の威や固より大なり、軍士の廣き、民衆の多きは固より恐るべし、而して終に此一片忠勇義烈の精神に敵する能はざるなり、

今や戦勝は光榮ある平和を齎したりと雖も、不幸にして軍隊の内臓は、過去戦役の爲め、多少の變調を來せる疑なきこと能はず、今後帝國軍隊の基礎となり、典型となり、永く此光榮ある忠勇義烈の精神を維持發揮

し、戦役以前に勝る良好なる種子を培養繁殖すべき重任は、懸りて今後入隊せんとする壯丁の肩上に在り、則ち其當初の教育を擔任する將校の責は極めて大にして、其任は極めて重しと謂ふべし、

平時に於ける軍隊の教練も、固より精神教育と重大なる關係を有するを以て、其進歩は時間と正比例を爲すものに非ず、故に假令督課嚴刻、夜を以て日に繼ぎ、兵士の技術をして如何に精熟ならしむとも、其基礎たる精神教育に重きを置かざれば、徒らに葉に灌ぎて根を枯すと同一の愚に終らんのみ、但し此精神教育は、形に在らずして意に在り、外に在らずして内に在り、之

に關する著述の如きも、若し徒らに漫然看過するのみにして、之を熟讀玩味せざれば、何の功用もなし、猶牛肉は甘美にして滋養に富むも、之を嚙下するのみにて之を咀嚼せざれば、却つて胃腸を害ふが如し、余茲に見るあり、新徴兵士の精神的教育に資せんと欲し、自ら非才を揣らず、此書を著せり、敢て山海の珍羞といふには非ずと雖も、亦藜藿糟糠と其味を殊にするを信ず、新徴兵士若し之を咀嚼玩味し、其忠肝義膽を滋養長成する一助となさば、望外の幸なり、

明治丁未一月

著者識

### 編纂に關する注意

- 一、本書は休日を利用し、余が昨年實施せし新兵の精神教育を集録せしものなれば、素より其順序等は、一に讀者の撰むに任すと雖も、唯要するに新兵の境遇と時機とに適當する如く、參考せられんことを希望す、
- 二、新兵の能力を顧慮し、卑近にして領會し易く、且記憶に便なる歌句俚諺等は、往々之を記載せり、故に實施者は時に摘録して之を室内に掲げ、諷誦に供す

るときは、自然益することあるべし、  
 三、本書は近時の戦役に於ける、勇士の逸話等を全く省きたり、是れ各隊に直接の好材料多きを以てなり、

# 軍人精神教育目次

一	新兵入隊に關し古兵に與ふる訓示……………	一丁
二	新兵掛助教助手に與ふる注意……………	九丁
三	新兵入隊の挨拶……………	十三丁
四	敬禮の必要……………	十五丁
五	服裝……………	十七丁
六	體操の必要……………	十九丁
七	體操の効益……………	二十一丁
八	國體……………	二十四丁

九 汝等の決心

二六丁

一〇 一心石を徹す

三十丁

一一 精神一到何事か成らざらん

三十二丁

一二 心だに誠の道にかなひなば、祈らずとて

も神や守らん

三十四丁

一三 不動の姿勢

三十八丁

一四 忠孝一致

四十二丁

一五 兵隊を置かれたる目的

四十六丁

一六 武器の尊重

五十丁

一七 叩かれて頭を上ぐる雪の竹

五十二丁

一八 わがものと思へば軽し傘の雪

五十四丁

一九 松竹梅

五十六丁

二〇 保護色

六十丁

二一 習ふよりも慣れよ

六十三丁

二二 雨滴石を穿つ

六十四丁

二三 實るほど頭を下ぐる稻穂かな

六十八丁

二四 自信力進取力

七十丁

二五 身體あつての物種

七十二丁

二六 夢喰ふ虫辛きを知らず……………七十二丁

二七 淡白なれ、正直なれ……………七十五丁

二八 憂き事のなほ其上に積れかし、限ある身の心ためさん……………七十八丁

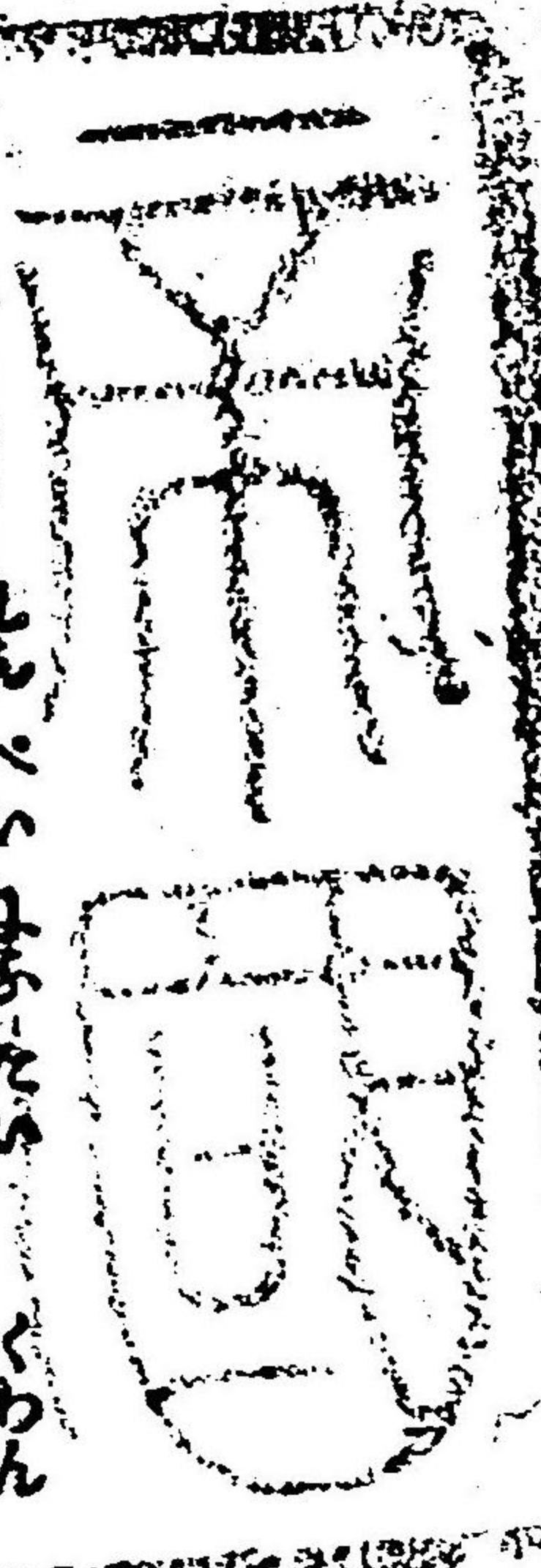
二九 麻の中の蓬……………八十二丁

三〇 惜まれて散るを櫻の譽かな……………八十三丁

# 軍人精神教育目次終

## 軍人精神教育

S N 生 著



新兵入隊に關し古兵に與ふる訓示  
 汝等も知る通り、來る何日には新兵が入隊する故に、茲に之に關し、汝等の心懸くべき事柄を示さん。

中隊の兄株であつた三年兵も先日除隊となつて、間もなく今迄の二年兵は三年兵となり、初年兵は二年兵となる。最早班内に於て彼是と小言を云ふ者がなく、定めて汝等

は氣樂なことであらう。然し人といふものは、兎角上から意見をする者が無いと、終に我儘になつて、諸規則の履行が確實でないやうになる。

又古參兵になると、全く鬼の首でも取つたやうに思ひ、兎角生意氣よなつて威張り散らす。例へば自分は烟草をふかしながら机にもたれ、腮で新兵を指揮し、「某は靴を磨け、某は茶を持ち來れ」などと、まるで殿様のやうなつもりで居る者がある。

勅諭にも、上の者は下の者に向ひ、聊も輕侮驕傲の振舞

があつてはあらぬ。公務の爲めに威嚴を主とする時は格別、其外は務めて懇に取扱ひ、慈愛を專一と心懸けよと、殊更に仰せ給はつてある。汝等夢にも此御訓を忘れてはならぬ。若し今迄の三年兵等に多少面白くない事が有つたにせよ、汝等は決して之を真似てはならぬ。我身をつめつて人の痛さを知れと云ふこともあるから、此年次の變り目に於て斷然改良をなし、軍隊の一大惡風であるところの、古兵が新兵に對して威張るといふ種を絶つやうにせねばならぬ。



次に「新兵は古兵の鏡なり」といふことがある。即ち汝等古兵の善いことも悪いことも、悉く此度入隊する新兵に映るのである。一體新兵といふものは、年齢ころ二十歳に達して居るけれども、軍隊のことに就いては、全く嬰兒の境遇にあるものだから、子が親に似、弟が兄に似ると同じ道理で、毎日一所に生活する古兵に似るのである。故に汝等の責任は甚だ重いことを忘れてはならぬ。殊に汝等も記憶があるであらうが、入隊した當時は見るもの聞くものが皆新奇であるから、一番能く覺えて何時

までも忘れられないものである。故に新兵入隊當初に於ける汝等の行動は、一層謹まねばならぬ。即ち班内に於ける起居動作、言語等を初めとし、諸物品の整頓、手入、清潔法は云ふ迄もなく、敬禮、服装、態度等、殊に注意戒心を加へ、苟も新兵の手本として耻ぢないやうにせねばならぬ。中にも言語は最も優くするやうに心懸けよ。何故かといふに、一體軍人の言語は活潑であるから、地方人が之を聞くときは、大層角がある如く聞ゆる。殊に新兵が恐々入隊するに當り、劈頭から此大音を發して向ふときは、

彼等は叱責せられたる如く感ずるのである。故に殊更温和懇切を旨とし、何事も綿密丁寧に教へ、能く新兵の腹に落ちるやう説明せねばならぬ。彼等は少しも勝手が分らないのであるから、被服の用法、食事の状態、團圓の所在等は、最も注意してやらねばならぬ。

次に汝等には少々面白からぬ話であるかは知らぬが、汝等は一體軍隊の正式教育を受けた者でない。即ち三十七年兵は戦役中に生れ、三十八年兵は戦役後、補充隊の甚だ混雑してゐる間に入隊をした者であるから、平時の整

頓した軍隊の味を了解して居ない譯である。云はゞ俄細工の兵隊である。然し此度入隊する新兵は、萬般が整備した平時の聯隊に入りて、初から完全な教育を受けるのであるから、今後我陸軍の基礎とあり先祖となり、長く帝國軍隊に血統を残し、我軍隊が立派な軍隊になるも、悪い軍隊になるも、一に新兵の状態に據るのである。即ち最も大事な種子であることを忘れてはならぬ。若し汝等が悪い手本を示せば、末長く日本の軍隊が悪くなる。又善い手本を示せば、帝國軍隊が善良の位置に進むので

ある。實に汝等の責任は甚だ重大である。故に重複に涉るやうなれども、汝等が今後注意實行せねばならぬ大事な事柄を茲に摘んで云へば

- 一、諸規則の履行を一層確實にすべし
- 二、新兵に對し決して傲慢なるべからず
- 三、起居動作は嚴格なるべし
- 四、言語應對は活潑なるべし
- 五、新兵に對する言語は極めて温和懇篤なるべし
- 六、新兵より問ふことあらば丁寧親切に説明すべし

- 七、姿勢、敬禮に注意せよ
- 八、物品の手入、整頓、舎内の清潔、窓戶の開閉等に注意すべし

九、服装態度を省みよ

十、新兵を使用すべからず先づザツト以上十箇條である。汝等能く之を服膺し、決して忘れてはならぬ。

二 新兵掛助、助手に與ふる注意

諸子は來る一日入隊すべき新兵の助教或は助手に選拔せ

られた。追々時侯も寒氣に向ふ時であるから、甚だ御苦  
 勞であるが、充分精勵せられんことを希望す。  
 先日古兵以上を集めて注意した事柄は、諸子にも直接最  
 も大切な事であるが、尙茲に改めて特に助教、助手として  
 の必要なる注意若干を與へん。  
 人が一つの道具を製造するには、先づ其刃物から磨いて  
 かゝらねばならぬ。曲つたり錆が出てゐる刃物で細工を  
 したならば、決して立派なものはお出来ぬ。丁度新兵は素  
 木である。諸子は之を細工して行くのだから、先づ各自

の伎倆を磨いて、錆や屈曲のないやうにして置かねばな  
 らぬ。更に之を例へて見れば、茲に兵隊といふ人形を鑄  
 るとせん。諸子は恰も其鑄型である。其鑄型が悪ければ  
 人形も從つて悪いのである。故に諸子は何所までも立派  
 な鑄型であることを心懸けねばならぬ。就中諸子の姿勢、  
 態度等が全然新兵に傳染することは、子が親に似ると同  
 様で、誠に争はれない事實であるから、教練中と然らざ  
 るとを問はず、一層注意せねばならぬ。教育指導は丁寧  
 懇切にして、率先奮勵、萬事好模範を示し、忍耐事に當

り、苟も苛責酷遇に渉る如きことがあつてはならぬ。  
 解説は快活なる音聲を以てし、綿密にして平易なる語句  
 を用ゐ、新兵をして了解し易きやう注意せよ。然れども  
 常に、萬縷の言も一つの行爲に及ばないことを忘れては  
 ならぬ。  
 次に若し古兵の中に心得違ひの者があつて、新兵に面白  
 からぬ動作があらば、必ず之を改良せしめ、常に新兵を  
 庇護し、斷然古代の遺物であるところの、新兵虐遇の跡  
 を絶つことを切望する。

諸子は自ら精神を爽快ならしめ、而して勉めて新兵を快  
 活に養成すべし。尙又新兵の性質、器量を看破し、之に依  
 りて部下を遇し、公平を旨とし、家事其他の境遇より來  
 る新兵の苦慮を察し、慰安融解の方法を實行し、樂みて  
 業務に従事するやうに導かねばならぬ。  
 入隊當日は諸子の御苦勞一方でないけれども、何卒萬般  
 遺憾なきやう注意せられたし。被服の着用、食事、便通、就寢  
 等に就いては、此上充分研究を要することならんと信ず。

三 新兵入隊の挨拶

茲に皆々（此時汝等とか御前とか云ふのは穩當ならず）は目出度く入營をせられた。私は某である。今日から皆を教へて行く先生となるものである。皆々は今迄軍隊といふ所は、つらい苦しい所だと思ふて居たかも知らぬが、それは二十年も昔のこと、今の軍隊は夢にも其様なことではない。甚だ面白い所である。又決して窮屈な所でない。唯今まで皆々は氣儘に寝たり食ふたりして居たのが、軍隊では時間を定めて働いたり寝起をするばかりで、漸々慣れるに従ふて、却つて樂になり、身体が強壯

になるのである。少しも心配をするには及ばない。茲に並んでゐる者が、是から皆々を教へ込む人達である。此人達が兄となり、私が皆々の親となつて教へる覺悟である。故に皆々安心するが宜しい。家へ手紙でも出す時には、此旨を知らせるがよからう。總べて勝手の分らない事は、古い者から教へるではあらうが、また遠慮なく尋ねるがよろしい。くれぐれも落ちついて安心せよ。

四 敬禮の必要

「鳩に三枝の禮あり」といふことは汝等も知つて居るだらう。鳩といふ鳥は甚だ感ずべきもので、子は決して親鳥より高い枝に棲らぬ。いや、高い枝どころではない。子は親の棲れる枝から、必ず三枝下つて棲り、其分限を立派につけてゐるといふ。其律義なことは、鳥でさへ此様である。況して萬物の長たる人間であるからは、尙更のことであらう。それ故に汝等が村に在るとき、他人に遇ふ毎に夫れく挨拶をしたであらう。敬禮といふは、解り易く云へば挨拶である。軍隊の如く多衆が一所に居

る所では、殊に此敬禮が大事である。さもあくば上下の別がつかないやうになる。それだから兵隊が人に遇へば、必ず手を舉げて御互に挨拶をするのである。

五 服装

日露戦役の御蔭として、近來非常に軍人の價値が貴くなつた。何故かといふに、どのやうな町や村へ行つても、どのやうな山の中へ行つても、兵隊さんくと呼ばれて持てはやされ、軍人が一人通れば、通行人が振り向いて眺める程、世間の人から目を付けられるやうになつた。

然し此様に世間から目を付けられ、ば付けられる程、軍人の役目が重くなつたのである。先づ第一に軍人は服装（みなり）態度（ふうつき）に注意せねばならぬ。汝等が日曜日（にちようび）に外へ出れば、新兵々々と人民が云ふであらう。これは何故であるか。別段顔に新兵といふ札が附いてゐるでもないが、唯汝等の服装と態度とが、何となく古い兵隊に劣るから、素人にも能く分るのである。故に營の内（うち）外を問はず、身なりを良くし、帽の冠り方、着物の着方、釦の締め方、靴紐の結び方、劍の帯び方等を常に用心し、又歩

行するには直ぐ前を睨み、頭を下ぐることなく、素に側（わき）を見ることなく、肩を張り腰より上を伸し、軽く手を振り、大股で元氣よく歩き、あのやうに立派な兵隊があれば、何所の國と戦争をしても勝てると、世間の人から云はれるやうにならねばならぬ。

六 體操の必要

汝等が入隊してから以來、手を振り體を廻し脚を曲げなとして、毎日體操をするのは何の爲めであるか。入隊前各自の従事したる職業が種々異れると同様に、汝等の體



つきが種々に違ふのである。例へば坐業をしてゐた者は  
 兩脚が曲つてゐるとか、鍛冶屋であつた者は右の手が太  
 いとか、様々の悪い癖がある。然るに軍隊では之を一つ  
 の型へ入れて鍛へなければならぬ。さればとて曲れるも  
 のを截りて繼ぎ直すといふ譯にも行かない。唯、體操と  
 いふ藥で治すより外はないのである。然し永年來の癖で  
 あるから、中々一日や二日で直るものではない。自ら好  
 んで開さへあれば體操を爲し、頭の曲れるものは頭を動  
 かし、手の伸びざるものは手を、脚の伸びざるものは脚

を、始終伸すやうに稽古を爲し、一日も早く立派な軍人  
 の姿勢とならねばならぬ。

七 體操の効益

世間の人は兵隊といへば、直に身體の強い立派な體格の  
 者と考へるであらう。實際其通りである。然し入隊した  
 時から、皆が其様に立派な體格ではない。試みに汝等を  
 見ても分るが、中には細い瘦せた者も居る。然し軍隊に  
 居る間に體操をするので、除隊の時には皆が揃ふて立派  
 な身體となり、村の人から羨まれるやうな風よなるのは

實際であらう。體操といふものは有難いものではないか。常々體操をして手足體を運動すれば、血の循環が良くなり、食物が能く消化し、気分が快活とあり、身體が太るのである。論より證據、車夫は毎日走りて脚を使ふ故に脚が太り、鍛冶職は手を使ふ故に手が太るのであらう。又百姓は田畑を耕す爲め、身體を使ふから、肥れた者が多いけれども、商人は帳場に坐り、身體を動かさざるにより、顔色青白く身體瘦せ細り、以上の者に比較すると兎角病勝ちである。

豪家の息子は美食すれども、身體を動かさざるにより虚弱となり、之に反して日々勞働する者は、粗食なれども却つて強壯なるは、争はれぬ事實である。身體の運動、取りも直さず體操の効益は、實に非常なるものでないか。尙解り易き一例を云はゞ、汝等が家にゐた時、毎朝毎夕氏神へ參詣し、息災延命を祈り、身體の強壯ならんことを願ふときは、不思議にも強壯となる如く思ふたであらう。是れ決して神佛の御利益でない。自身が參詣する爲め、識らず知らず運動するにより、自然健康にあるので

ある。見よ。多くの神社佛閣は險しき山の上にある。是れ信徒が參詣するに際し身體を運動し、且高き所に於て新鮮なる空氣を吸入する爲め、達者になるのである。昔は之を神佛の御利益と考へて居たのである。故に身體を強壯にせんと思はゞ、別に神佛を祈るに及ばず、毎日怠らず體操を行はゞ、靈驗極めて現實である。

### 八 國體

我大日本帝國は三千年ばかり前に出來たのである。我々が伊勢の太神宮と申し奉る 天照皇大神は、實に其頃の

御方である。而して三千年後の今日、今の 陛下に至らせらるゝ迄御代々、此 大神の御血統を受けさせられた御方が、此國を治め下々を御憐み下さつたのである。其昔 天照皇大神などに従つてゐた家來は、我等の大先祖である。されば伊勢大廟は、我等の大先祖が仕へ奉りし神であるといふので、其尊いことは申す迄もないことだ。我々が今日あるのも、全く 大神より以來其血統を御受けになつて居る御代々の 天皇が、我々の先祖代々を慈み下さつた賜である。上下此様な忝い關係を持つて居る

國は、世界廣しと雖も二つとない。だから時として外國と戦争をすることもあるが、下々は必死となつて戦をするので、未だ一度も外國に負けたことがない。遠きは汝等が歌にも詩にも唱ふ元寇、近きは日清、日露の戦争で明であらう。實に有難い國柄である。おまけに時候は長く、物産には富む。誠に得難い世界第一の國で、此國に住む我々は極樂に住むやうなものであるから、我々は夢にも愛國の精神を忘却してはならぬ。

九 汝等の決心

汝等が片時も忘れてならぬ事は、勅諭の第一にある忠節と云ふことである。此忠節といふのは、自分の身命を惜まぬ君國の爲めに働くことで、言ひ換へれば、事苟も國家の利益になると思ふたならば、例令我身は粉碎せらるゝも敢て辭退せぬ。即ち戦争に際しては、水火を避けず勇ましく戦ふことである。然らば平時にありては、如何になせば忠節を盡すことが出来るであらうか。他なし。平常教へられる學科と術科とを熱心に修得し、始終心懸けて、何時戦争があらうとも、役に立つ良き兵卒となる

のに限るのである。然るに茲に良き兵卒となり、學科術科を熱心に修得して行くのを妨げるものが一つある。それは汝等の懐郷心である。汝等は入隊日尙淺く、軍隊の眞趣味を解しないから、或は家郷の氣儘であつた時代を思ひ出し、或は郷友と共に遊んだことを思ひ出すであらう。さなくんば父母兄妹を戀想する者もあらう。尙或は父母生活の困難を心配して居るものもあらう。或は暖かき家族團樂の快樂を追想する者もあらう。然し汝等は名譽にも籍を軍隊に置くことゝなつた以上は、年限中は全

く家郷の人でない。故に一時も軍隊の人であると云ふことを忘れてはあらぬ。何程汝等が考慮しても、軍隊の人は矢張り軍隊の人である。然るに戀々家郷のこと等を追想するは、寧ろ婦女子の業であつて、堂々たる帝國男子の夢にも見るべきことでないと考へよ。人力には限りあるを以て、精神を家郷のことに費す以上は、日常の學科術科に全力を盡すことが不可能となるは、明白な道理である。これが爲めに終に修得記憶良好ならずして、人に後れ人に戒められ人に笑はるゝに至るので

ある。  
汝等よ。奮起して一日も早く懐郷心を去り、勉めて精神を爽快にし、全力を學科術科に注ぎ、天晴な兵士となり、樂しく年限中忠節を盡すことを期さねばならぬ。

一〇 一心石を徹す

汝等は一白石を徹すと云ふことを知れるか。  
昔朝鮮には虎が居て、人を喰ふことがあつた。當時葉傳使といふ人が、或る雪の降る日、他所から歸つて來て、其愛見の見ねざるに驚き、狂せんばかりに家中を探した

が見當らぬ。如何せん不圖庭先を見ると、虎の足跡に沿ふて、赤い血が滴つてゐる。さては虎の所業なりしと悟り、何とかして此體を救いくれんものと、弓を取り持ち其足跡を拾ふて搜すと、遠からずして前に、大きな虎が牙を尖らして蟠つてゐた。葉傳使は勇んで、己惡き奴かな。愛見の敵、一箭に射殺さんものと、弓を引き絞つて放つたが、狙過たず胸の邊に中つたから、大いに喜んで、其皮を剥がんものと、件の虎に近より見ると、こは如何に、射止めしは虎ではなく、大きな岩であつた。而

して不思議にも、矢は羽を没せんばかりに堅き岩に徹つてあつた。葉傳使大いに驚き、虎にあらで岩なりしか。然し能く此堅き岩に矢が立つものかなど、再び舊の所に、前の如く此岩に矢を放つたが、何として徹らんや。大きな音が聞えて跳ね返り、幾度繰返しても遂に徹らなんだと云ふ。汝等は之を聞きて如何に考ふるか。

一 精神一到何事か成らざらん

前に話せし葉傳使のことに就きて、汝等は如何に考へし

か、彼は最愛の兒の讎を報いる爲めに熱心となり、全身の心力を之に盡せしにより、石が虎と見え、不思議にも實際上有り得べからざる、堅き石に矢が立つ現象を來したのである。而して既に其虎と思ひしは岩にして、最早我敵ならざるを覺りし以上は、如何も鋭き矢を以てするも、亦之を傷くることすら出来なかつたのである。嗚呼同一の矢であつて、如何にして斯く相違せし二種の現象が起るであらうか。他なし。精神の充實に依りて、此不思議ある事實が生れたばかりである。彼は愛兒の敵

あり。何とかして報い呉れんと、全力を一筋に傾注した結果である。

古語に曰く、「精神一到何事不成らざらん」と。

汝等よ幸に玩味して自省の資に供せよ。

二三 心だに誠の道にかなひなば、断らずとも神

や守らん

二十四孝の話は何人も知るところである。就中孟宗の事は、本邦にも孟宗竹と稱する竹がある程ゆゑ、殊更入懇の話であらう。彼は親に對して孝養怠りなかつたが、或

る寒中に彼の老父は筍を喰べたいと云ふので、孟宗は何とかして父の望を満したいと思へども、寒中のこととして之を求むる由がない。勿論只今の如く罐詰などの有るべき筍もなければ、雪の降るのも厭はず。鋤を持つて籾の中に至り、せめて小さき芽なりとも得たいと、先づ積る雪を掻除いたが、不思議にも大なる筍が其中に生じてあつたので、之を持ち歸りて親に薦めたと云ふ。  
又同じ二十四孝の中で、冬日父が鯉を望んだが、之を購ひ又は之を求むる術もないので、孝子は大いに苦心し、池



に至りて之を獲んとしたが、厚い氷が張りつめて破ることも出来ざれば、一案をめぐらし、遂に我體温を以て漸次氷を溶かさんと、凜冽たる寒風を物ともせず、氷上に横たはつたのである。暫くすると不思議にも、體より稍隔たれるところの氷砕け、下から大なる鯉が躍り出で、氷上に跳ね廻つたので、孝子は大いに喜び、之を父に供したといふ。

以上は支那の話であるが、我日本にも、之に似た話は其數甚だ多い。其中にて、先づ美濃養老の瀧のことが、最も

有名であらう。味よき酒の川が流れて居たとは、誠に不思議ではないか。

汝等は是等の話に依りて、如何に感じたのであるか。たゞ不可思議な事實であると云ふだけで終らうとするか。

「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとも神や守らん」と云ふ歌がある。其意味は、心さへ誠實であつたならば、如何なる事でも自分の思ふ通り出来ると云ふのである。かの三孝子は、自己の誠實一心に依りて、神佛も爲めに動かされ、有り得べからざる不可思議な靈驗が、實現し

たのである。  
是等の事實に反し、精神が誠實でなかつたならば、如何に神佛に祈るとも決して加護冥福のあるものでない。汝等よ。心さへ誠ならば天下に憂ふことはない。殆んど人力に及ばぬ不可思議な結果ですらも、之を得ることが出来るのである。

一三 不動の姿勢

汝等が入隊以來、最も多く繰返されたことは、不動の姿勢である。不動とは「動かぬ」ことである。

不動尊は全身火を以て熱せられるも、劍を持ち自若として動かない。不動の姿勢とは、即ち「不動尊の姿」と云ふたをせある。

軍人は「一度氣を着け」の號令ある以上は、水火骨に迫るとも、銃を持ち自若として動かないものである。此時に當り、其形貌は壯嚴で、其意味は深大である。其形貌に依りて教練を習得し、其意味に依りて服従軍紀、忍耐、勇猛、其他總べての軍隊的精神が教育されるのである。嗚呼、不動の姿勢は、事頗る簡に似て、軍隊の總べての部分を網

羅するものである。姿勢良好にして其曙光ある者は、良  
兵士である。と直ちに断言して差支ないのである。

「氣を着け」の號令ありて後、或は眸を動かし、或は手を  
曲げ、或は脚を開く等の事あるは、之に依りて軍隊教育  
の總べてが不完全であることを廣告して居るものである。  
汝等よ。不動の姿勢は入隊後最も多く演習し、今後軍  
人たる間は、最も多く行はねばならぬことであるを忘れ  
てはならぬ。

不動の姿勢は軍隊教練の總べての基礎である。敬禮轉回、

整頓を始めとし、部隊の大小に論なく、運動の如何を問  
はず、皆其根本は不動の姿勢である。根本細くして枝葉  
榮ゆる樹はあく、基礎薄弱で構造堅固を家屋は決して建  
てられぬものである。

汝等は如何に疲れたる時に於ても、如何に寒き時に於て  
も、「氣を着け」の號令のあるところ、不動にして犯すべ  
からざる風貌を自得するやうに、修養せねばならぬ。

一四 忠孝一致

闇夜に提燈と云ふ諺は、暗夜道に迷ふた者が、提燈を得

たときの有難さを云つたものである。闇夜提燈を得たときは勿論有難いに相違ないが、世間には尙比較の出来ぬ程有難い事がある。それは外でもない、太陽である。吾人は闇夜に提燈あくも、尙路をたどることは出来るが、若し太陽が一日なかつたならば何うであらうか。無論宇宙の萬物は、皆死滅してしまふであらう。天皇陛下の御恩と親の恩とは、亦斯の如き比較である。汝等の親は汝等を生み、嬰兒のときから今日迄二十一年間、汝等の想像の及ばない程な苦勞心配をされて、汝等を育

て、くださつたのであるから、其御恩の深いことは譬へやうもないのである。然し天皇陛下の御恩は、尙それよりも大いのである。何故かと云へば、汝等を育て、くださつた父母は、一體どうして生活して来たのであるか。汝等の目に映る此澤山の田畑家屋は、抑も何人の所有であるか。勿體なくも我日本全土は陛下の御領分である。日本臣民は有難くも之を僅少の年貢を以て拜借して居るのである。即ち汝等の親も陛下の土地を拜借し、家を

造り穀物を植ゑ、汝等を育て、くださつたのに外ならぬのである。

若し茲に陛下の土地を拜借することが出来あかつたならば、汝等の親は家を建てることも出来ず、穀物を植ゑることも出来ない。即ち汝等の親は疾に死滅してしまつて、勿論汝等が此世にあらう筈もないのである。

之を見ても、汝等の祖先から汝等の子孫の末迄も、此世に生存して行くことの出来るのは、全く陛下の御蔭であることが解るであらう。汝等よ。此大恩ある陛下の

爲めには、其御下しになつた五箇條の御諭を守り、立派な軍人となつて父母を喜ばせよ。是れ即ち君には忠、親には孝であるのである。

若し一旦事ある日には、君の爲めに身命を抛て。然るときは汝等の親の名は世間に廣まり、人々に尊敬せられ、名譽此上もないことである。是れ亦取りも直さず忠義と孝行とである。

故に如何なる場合に於ても、君に忠義を盡すことは親に對して立派な孝行であると云ふことを、肝に銘じて忘れ

てはならぬ。

一五 兵隊を置かれたる目的

凡そ此世界に生活して行く動物には、必ず自己を防護する爲めの器械、即ち武器がある。それは若し此武器がないときは、他の動物から攻められて、一も二もなく喰はれてしまふからである。試みに見よ。毛蟲には毒を有する毛あり。芋蟲は悪臭ある黄なる二本の角を藏め、蟻百足、蟹等は鉗を持ち、蜂は尻に針を匿し、蝮蛇は毒ある歯を有し、貝龜等は敵來るとき堅き甲殻の中に身體を收め、

鳥賊は翼を咲きて敵の目をくらまし、鱈鰻等は鋭き鱗を具へ、馬には蹄あり、牛には角あり、象には牙あり。其他數へ來れば、實に限り無いのである。

世界に存在して居る國と國との關係も、丁度此通りである。弱い國は強い國から攻められ、土地償金等を奪はれることが度々ある。例へば支那のやうな有様である。

我大日本帝國は地味豊饒、山水明媚で、恰も鯛鰻等が魚類中で最も美味なると同様である。美味あるのは他の動物が嗜好すると同様に、諸外國が我國に垂涎して、之を

蠶食したいと思ふは當然である。論より證據、六百年前に元の國から攻め取らんと押寄せ來りしは、汝等が軍歌で謠ふ通りである。鯛鯉に彼の鋭き鱗がなかつたならば、彼等は皆鯨の餌食となつてしまふのである。我國に完全な軍備、即ち忠勇な兵士がなかつたならば、疾に何所かの領分となつて居たかも知れぬが、幸にして上に一天萬上の天皇を戴き、二千年來忠烈勇猛の氣が傳來してゐた爲め、一度も外國の侮慢を受けたことがないのである。それのみならず、擧つて外國を攻めて國威を海外に發揚

したことは、近く日清、日露の戰役でも明である。汝等は讀法を見ずや。兵隊は國家を保護し、皇威を發揚する爲めに設け置れたものである。故に之を前述の動物に比較すれば、毛蟲の毛、蜂の針、鯉の鱗、牛の角のやうなものである。其毛、其針、其鱗、其角が丈夫でなかつたらば、毛蟲、蜂、鯉、牛は、强者の爲めに攻亡されて、生活することゝは出來ないであらう。それと同じく、國家の干城であるところの兵隊があかつたならば、其國は存在して行かぬのである。

汝等よ。自奮して銳き毛となり針となり鱗角となり、以て他に比類なき國家を護れ。

一六 武器の尊重

勅諭の中にも、軍人は戦に臨み敵に當るのが職業である  
と宣ふてある。然らば汝等は戦に臨み何を持ちて敵に當  
るのであるか。言ふ迄もなく武器を持ちて戦闘するので  
ある。即ち武器は汝等の職業たる敵に當り戦闘するところ  
の道具である。語を平にして云へば商賣道具である。  
武器あつて始めて、汝等は敵を殲し我軍を勝たしめ、以

て汝等の職業を全らし、忠節を盡すことが出来るのである。  
汝等は如何に勇敢で忠節を盡さうとしても、武器が  
ないときには何うして其効果を全うすることが出来やう  
か。徒らに犬死するばかりで、到底戦勝を占めることは  
出来ぬであらう。故に汝等は、武器は汝等の本分を全か  
らしめるところの唯一の道具であることを、決して忘れ  
てはならぬ。  
尙且武器に、畏くも 陛下の御紋が刻してあつて、其  
神聖にして尊きことは云ふ迄もないことである。されば



其使用を丁寧にし、充分に之を愛護せねばならぬ。

一七 叩かれて頭を上ぐる雪の竹

「叩かれて頭を上ぐる雪の竹」と云ふことがある。これ竹の上に雪が積り、其重量に依り竹は下方へ彎曲して居る。今若し此竹を叩いてやれば、雪が落ちて竹は再び頭を揚げる事が出来るといふことである。汝等よ。事柄は是れだけであるが、其合むところの意味は深重であるぞ。

例へば汝等は竹である。汝等は入隊日尙浅いから、教練

上精神上矯正せねばならぬ點が澤山ある。これが即ち雪である。汝等が目今の有様は、恰も雪の爲めに彎曲したる竹であると思へ。上官は何とかして早く其雪を落してやらうと、焦心つてゐるのである。

又「憎うては叩かぬ杖ぞ雪の竹」といふことがある。上官は汝等が憎いから、やかましく注意矯正するのではない。何とかして早く積る雪を落とし、頭を揚げさせ、立派な軍人としてやかたいと思ひ教育するのである。汝等よ。若し不幸にして此注意教育を聞くに熱心を以てせず、

矯正修得に忠實でなかつたならば、何時迄経つとも雪は落ちることなきのみならず、益々其上に降り積るから、遂に竹は折れてしまふのである。

一八 わがものと思へば軽し傘の雪

傘の上又積る雪も、皆自分のものであると思へば、一向重くも感じないであらう。それと同じく、汝等は毎日行ふところの教練が如何に苦しからうが、また此頃の氣候が如何に寒からうが、また興へられるところの注意が如何に困難であらうが、其教練其氣候其注意が皆汝等の爲め

にあると思ふならば、一向苦しくも寒くも困難にも感ぜぬであらう。見よ。汝等は教練に依りて戦闘の方法を習ひ、氣候に依りて身體を練り、其結果遂に良兵卒となるのである。「可愛い子に旅をさせよ」と云ふのも、此所の道理である。

上官はつまり汝等の親である。親が子の成人を望むと同じく、上官は汝等が一日も早く立派な軍人となることを祈つて居るのである。可愛い子なればこそ苦しからうが旅をさせてやる。子たるものは苦しい旅をして、種々な

經驗を積みでこそ、始めて立派な人間となることが出来る。吾人は汝等が可愛いからして旅をさせてやるのである。即ち嚴寒に教練をし、或は困難なる注意を與ふるも、皆汝等の爲めであることを、決して忘れてはならぬ。

一九 松竹梅

新年に於ては、各の門前又は床の間に松竹梅を飾るのを見るであらう。今茲に何故に松竹梅が、新年に飾られべく目出たいものであるかを話さう。汝等試みに四方を眺め見よ。目の及ぶ限り野山は悉く落葉して、只幹と枝と

が枯れたやうに立つて居るばかりである。其間に青々として高く天に聳ねて居るのは、松の木である。古語にも「歳寒うして松柏の凋むる後る」を知る」と云ふことがある。夏去り秋が来て涼しくあるに従ひ、多くの草木は次第に黄葉し、いよく冬となれば、今見る通り其夏に於て繁茂してゐた跡形もなく、全く落葉してしまふのである。ひとり松は他の草木と異り、嚴寒霜雪を物ともせず、鬱然青々として其中に抽出して居るではないか。何ぞ其意

氣の勇壯にして其幹軀の強健なるや。  
 次は竹である。多くの植物の中で、節の立派に通つてゐるものは竹である。人も竹の如く節がなくではならぬ。人間の節とは操と云ふことで、昔の武士は浪人をしても二君に仕へず、貞女は二夫に見ぬと云ふのは、即ち節である。竹は之を具體的に現して居るものである。勅諭にも、「軍人は忠節を盡すを本分とすべし」と宣ふてある。其節とは即ち之を云ふのである。次に梅は百花の魁と云はれてゐる。花木の数は澤山ある

が、寒日未だ蕾をも出すことの出来ぬ時に於て、獨り梅花は能く凜冽たる寒風を凌ぎ、皚々たる積雪を冒して、高操なる花を開き、馥郁たる香氣を放つのである。世人之を賞観するも無理ないことである。若し梅をして他の花と同じく暖き春に於て咲かしめたならば、これ程珍重せられぬかも知れぬ。松竹梅は斯の如き目出たき因由有るものであるから、我國にては非常に之を尊重して、飾り物ともするのである。汝等よ。願くば人間中の松竹梅となれ。如何ある困難辛

苦に遇ふとも、屈せず撓まず勉勵し、勇健松の如く、堅節竹の如く、馥郁梅花の如き良兵卒となれ。

二〇 保護色

前に述べた通り、總べて動物は他の強いものに攻め亡されぬ爲めに、各武器を持つて居るのだが、中には全く之を持たぬものがある。其最も手近い例を挙げれば、蛙、尺蠖虫等である。彼等は外敵の襲來に際し、之を防ぐべき武器を持たぬ代りに、不思議にも常に自分の體の色に依つて敵の眼をくらまし、其襲來を免れるやうになつて

居る。之を保護色と云ふのである。即ち雨蛙は常に青き葉の蔭に棲むにより青き色をなし、赤蛙は竹藪の中に棲むにより笹の葉の枯れたる如き色をなす。又山兔は、夏日は赤土の如き褐色を合せども、冬日積雪中にあるときは、其毛も白色に變化する。又尺蠖虫は桑の枯枝の如き色を持ち、恰も其枝であるかの如く附着して棲息するものである。實に彼等は斯の如き不思議な状態に依り、敵の眼を逃れて居るのである。軍隊も亦此通りで、先づ其服色に依りて敵の眼を避けるやうになつてゐる。以前は

黒色又は白色の軍服であつたが、實戦の経験により、現今  
 は悉く茶褐色としたのである。黒色又は白色は、遠距離  
 から目視することが出来るが、茶褐色は土砂等外界の色  
 に類して居るので、近づかなければ之を發見することが  
 出来ぬのである。斯の如く成るべく敵の眼を避け、損害を  
 受けぬやう注意されてあるにつけても、實戦も際し地物  
 を利用して、敵眼を遮蔽することは甚だ必要である。汝  
 等若し地物を利用することを怠るならば、速に敵より發  
 見せられ、死せずともよき時に死し、大いに我軍の不利

ものである。

軍人の技術は、戦闘に臨み武器を巧に使用することであ  
 る。生來其使用に巧な者は、平素は誠に立派であつても、  
 戦闘酣となり、危険の光景悲惨の情況が、漸く心目に映  
 ずるに従ひ、次第に氣が狂ひ、平時の精巧が鈍り、効力  
 が渺なくなるものである。然し多年怠らず使用に熟練し  
 た者は、心手期せずして一致し動くから決して此様な弊  
 害はなく、効用は極めて多いのである。  
 「習ふよりも慣れよ」とは此所である。

軍隊は如何に悲惨なる戦闘にも、敢て勝を制せねばならぬ。故にひとり銃の操法のみならず、萬般の技術教練皆單に之を習得したるのみにて満足してはならぬ。又生來器用なりとて、決して之に慢心してはならぬ。數を重ね復習を怠らず、心手期せずして相應するやうに熟練せねばならぬ。

二三 雨滴石を穿つ

前にも述べた通り人には性質器用なものとならざるものがある。器用なものは、兎角慢心して中途で其業を怠

るから、左程にも進歩しないのである。然し不器用なもの、一生懸命に奮勵するので、却つて器用なものより、意外の發達をすることが往々あるのである。「油斷は大敵」と昔の人の教へたのも、つまり此道理である。

馬は走るとは早い、が間もなく疲れるから、遠くの道を行くことは出来ないが、牛は遅い、がはりに休む間なく歩くので、能く重荷を曳いて遠い道を行くことが出来る。汝等よ。我不器用を怨むことなく、勉めて怠るなければ、遂には器用なものに勝る成功をすることが出来る。

「雨滴石を穿つ」といふ通り、勉強の力は實に恐しいものである。

汝等は花牌の中に、雨中傘を持つた人が、蛙の柳へ飛び付かうとするのを見つゝある繪を知れるならん。

彼は小野道風と云ふ人である。或る雨の降る日池の畔の垂柳の枝に、蛙が飛び付かうとするのを見出したのである。

其枝と水面との間が、稍遠かりし爲め、蛙は何回飛び付かうとしても、力及ばず、何時も舊の水中へ落ちるので

ある。然し其枝の尖には一疋の虫が棲つてゐるので、蛙は何とかして飛び付き、之を獲らうと撓まず勉めるのである。

斯すること數十回にして最後に辛うじて之に飛び付き、遂に其虫を獲り食ふたのである。道風之を見て大いに悟り、蛙でさへ彼の通りである。何回にても屈せず撓まず忍耐勉強した結果は、遂に其目的を達し得たのであると感服し、それより一心不亂に勉強して、遂に立派な學者となり、千年後の今に至る迄も、其名が残つて居るでは



ないか。汝等よ。勉めて蛙に劣る勿れ。

二三 實るほど頭を下ぐる稲穂かな

汝等は稲や麥の穂を思ひ出せ。良く實りたる穂は下へ下るが、空の穂は頭を上げてゐるではないか。丁度人間も此通りである。少しばかり物が出来る人は、傲慢になつて鼻を高くし、驕り高ぶるけれども、充分實際に出来る人は決して左様ではなく、何も出来ないやうな風を装ひ、却つて謙遜するのである。汝等よ。少しばかり物が出来たとして決して傲つてはならぬ。益々勉めて愈々頭を垂れ

よ。然するときは、世の人皆之を賞めるであらう。

これよ類似した事柄が今一つある。即ち「能ある鷹は爪を隠す」と云ふことである。見よ。鷹は鳥類の王とよばれるほど強い鳥であるが、平常不必要な場合には、爪を隠して外へ現さないのである。

勅諭にも、武勇には大勇と小勇とがある。仰せられてある。些細な事に人と争ひ、餘計なところに力拳を入れるのは、唯強いふうをするだけで、小勇である。斯の如き者は、戦場へ臨んでは却つて臆病で、決して立派な働を

することには出来ない。然るに之に反し、平常は誠に愚人の如く温和にして居るものは、悔れないのである。必要な場合となれば、身命を抛つて事ゝ當るのである。即ち隠した爪を出すのである。之を眞の大勇と云ふ。汝等も能ある鷹となり、平素は其鋭き爪を隠せ。

二四 自信力、進取力

汝等は本日二里の駈歩を實行したのである。汝等は之に依つて如何なる利益を得たであらうか。言ふ迄もなく自信力と進取力の二者を得たのである。

總べて或る困難なる事柄が一度經驗に上るの後は、自ら心に信ずる所が出来ものである。汝等は最早本日二里の駈歩を實行したに就き、それより以内の駈歩は、何時にても容易である。自身の價值、體力及忍耐力を信用することが出来るやうになつたであらう。是れ即ち自信力が附いたのである。又自身は本日二里の駈歩を實行して、僅に斯の如き疲勞を覺れたのだから、尙此上數里を増すとも、敢て難き業ではなからうといふ勇敢な氣象が出来て、今後二里以上の駈歩をも敢て臆せず決行せんとする

進取力が出来て来たであらう。斯の如くして進んで難事  
も當るといふ誠に頼もしい精神は發揮されるのである。  
軍隊が戦闘するには難事が多い。然し其成功と不成功と  
は暫く措き、苟も進んで之を決行しやうとする氣概さへ  
あれば、戦闘は期せずして捷ち得るものである。

二五 身體あつての物種

汝等よ。如何に熱心に教練を習得し立派な軍人とあらう  
としても、身體が弱かつたならば何うするか。汝等よ。  
戦に臨み天晴な働をなさうとしても、多病の爲めに戦闘

に臨むことが出来あかつたならば何うするか。身體あつ  
ての物種とはこれである。

汝等が如何に立派な軍人となり、天晴なる働をなし忠節  
を盡さうとしても、身體が弱く病氣であつたならば、決  
して其志を貫くことは出来ぬであらう。

故に平常衛生を重んじ、身體の強壯を保持せねばならぬ。

二六 蓼喰ふ虫辛さを知らず

蓼と云ふ草を喰ふて生活する虫は、其葉の辛いのを知ら  
ないのである。是れ毎日其辛いのを喰ふてゐるので、遂

にろれが癖となつて、一向辛いのを感ぜないやうになつたのである。癖といふものは恐ろしいものではないか。汝等も丁度此通りである。毎日困難な仕事ばかりして居れば、遂にはろれが習慣となり、何程つらい難儀な業務でも、一向苦しく感ぜないやうになるのである。習慣は第二の天性とは、之を謂ふのである。汝等は常に困難なる場合に處して、能く之を成し遂げる癖を附け、之を第二の天性となせ。安樂を求め癖が附けば、業務を怠つても安樂を食らねば居られないやうになり、酒を

飲む癖がつけば、酒を飲まねば居られないやうになる。喫煙も其通りである。あの害毒ある煙も、二度は一度より習慣となり、遂に廢することの出来ない悲境に陥るのである。汝等よ。善惡共に其習慣の恐るべきを知つたならば、速に往時を改革し、良習慣を養成することに勉めねばならぬ。

二七 淡泊なれ、正直なれ

讀法の第一條は、汝等に何を示すであらうか。

軍人の中にて虚偽詐言をなす者ほど、精神の卑劣な者は  
ないのである。

悪事千里を走ると云ふ諺の通り、陰で良からぬ事をすれ  
ば假令人は見て居ずとも、上官は其顔色に依つて之を觀  
破するだけの能力を備へて居るのである。

何人も知るまじと思ひ、巧言瞞着を工むとも、天網は疎に  
して漏さず、何人も之を免れることは出来ないのである。

汝等記憶せよ、不坦白は軍人の最大禁物であることを。

猿も木から落ちることあり。聖人とても過はあるのであ

る。

況して汝等に於て、固より過失がないとは限らぬ。然し

其過失を改むるに坦白正直であつたならば、何の咎むる

ところがあらう。寧ろ其心事の廉潔なるを賞するに躊躇

しないのである。

汝等よ。精神が潔白であれば、已に軍人たる要素の幾分

を備へて居るのである。

山高きが故に尊からず。人も爛熳たる高潔の徳があつて

こそ始めて尊いのである。

口に數萬の念佛を唱へても、心が曲なれば、決して成佛  
することとは出来ない。

勅諭にも「心誠ならざれば、如何なる嘉言も善行も、皆  
うはべの飾にて、何の用にか立つべき。心だに誠ならば  
何事もなるものぞかし」と、宣ふてあるではないか。

二八 憂き事のなほ其上に積れかし、限ある身の心

ためさん

汝等は此歌の意味を判断することが能く出来得るか。こ  
れは昔有名ある熊澤蕃山と云ふ人の歌で、其意味は何程

つらい事でも一向辭退は致さぬ。全體何所まで辛棒が出  
来るか、ひとつ試して見やうといふ、誠に剛氣な歌である。

汝等は此歌を薬として飲んだならば、何程困難な事でも  
我慢が出来るではないか。

露兵でも支那兵でも、人間である以上は、寒い時は寒い  
のである。苦しい時は苦しいのである。ひもじい時はひ  
もじいのである、然るに日本兵は、其寒さ苦しさをひもじ  
さを感じぬのであるかと云ふに、決して之を感じぬので  
はない。充分感じては居るが、唯之を我慢辛棒する根性

が強かつたから、終に戦に勝つただけのことである。戦争に於ては、汝等が到底推察も出来ぬ程つらい事が多いのである。見よ、近き日清、日露の戦役に於て、我忠勇なる先輩の辛苦困難をした有様を。吐く息が凍るやうな寒い日も、池の水が沸くやうな暑い日も、三日も四日も睡らず、飲まず、食はずに働いたことがあるではないか。此様な困難に遇ふても、辛棒を爲し遂げたから、遂に勝を制したのである。支那兵や露西亞兵は其我慢が出来なかつたから、戦に負けたのである。

平時軍隊に於ては、不幸にして是等の困難を實現することとは勿論、其百分の一をも味ふことが出来ない。

汝等は些少の困難にも躊躇するやうでは、到底未來の大戦に武功を現し、忠節を盡すことは出来ぬではないか。寒い時には何人も寒いが、之を辛棒し、苦しい時には何人も苦しいが、之を我慢し、ひもじい時には何人もひもじいが、之を忍耐し、而して始めて戦捷の月桂冠を望むことが出来るのである。

良薬は口に苦けれど、効能は多い。苦は樂の種である

ぞ。

二九 麻の中の蓬

路傍に生ずる蓬を見よ。莖の短かい曲つたものである。然るに麻の中に生ずる蓬を見よ。丁度麻の様は丈高く、眞直に成育して居るのである。是れ麻に連れられて、斯の如く良好に發育成長したのである。

汝等も丁度この通りで、外界四圍の戦友の情態に依つて、各自の性行は、著しく變じて來るのである。常に正良な戦友と交つたならば、恰も麻の中の蓬の如く、何時の間

にか其人も、善良な人物となるのである。

路傍の蓬は、不幸にして矮曲なる雜草と交つたから、遂に良好の成長をすることが出来なかつたではないか。

朱に交れば赤くなる。悪い人と交れば其人も悪くなる。

水は容れ物次第で、如何様にも形が變ると同じく、人は交る友により、善くも悪くもなるのであるから、汝等は

平素正直忠良なる兵卒を友として、我性行を涵養せねばならぬ。

三〇 惜まれて散るを櫻の唇かな



今や櫻花は爛熳として咲き匂ふて居る。  
 人は何故に此櫻花を賞するのであらうか。勿論其色の鮮  
 にして美しいのを賞するのではあるが、尙他に至大なる  
 原因があるのである。汝等思はずや、斯の如く爛熳とし  
 て咲き亂れ、花下幾千の男女は之を酔賞して居るけれど  
 も、一朝颯々として嵐が吹いて來たらば何うであらう。  
 花は散り色は失せて、忽にして亦舊の係をも止めないの  
 である。

櫻は花の王とまで云はれるものであるが、それさへ此有

様である。否これが即ち櫻花の櫻花たる所以である。爛  
 熳として艶を衒ひ芳を競ふときに於ても、一朝無常の風  
 が吹いて來たならば、未練もなく散り果て、しまふので  
 ある。人之を惜まぬはなけれども、亦其高潔を稱して措  
 かないのも、全く無理ならぬことである。  
 「惜まれて散るを櫻の譽かな、何んと句簡にして韻限り  
 ないではないか。實に昔から、「花は櫻に人は武士」と云  
 ふてある。武士とは汝等軍人のことである。軍人は花に  
 例ふれば丁度櫻である。其威勢の堂々たるのと、其風貌

の洒々たるのとは、世人之を羨むけれども、一朝無常の  
風の誘ひなば、復舊の枝には匂はぬのである。即ち爛熳  
として咲き亂れて居ても、一發の彈丸が飛んで來たなら  
ば、未練もなく戦場の露と散り失せるではないか。何ぞ  
其心事の勇烈高尚なる。

明日ありと思ふ心のあだ櫻、

夜半に嵐の吹かぬものかは。

汝等よ。汝等の職業は戦闘であるぞ。君國の爲めには鴻  
毛よりも輕き一命なれば、無常の風の誘ふに任せ、父母

妻子を忘れ、深く散りて、未練なき決心と覺悟とを發揮  
せよ。

# 軍人精神教育 終

軍人精神教育會付

明治四十年二月廿一日印刷  
明治四十年三月二日發行

正價金拾錢

著者 S N 生

發行及印刷者 相澤富藏

東京市京橋區南傳馬町一丁目一番地

印刷所 薰家活版所

東京市日本橋區蠣殼町三丁目十番地

發行所 厚生堂

東京市京橋區南傳馬町一丁目一番地  
電話八三八 振替口座三二八三  
本居貯金

# 厚生堂發行圖書目錄

## 補修漢文教課書

第二高等學校教授瀧川龜太郎君編纂、文部省檢定出願中、生徒用及教師用各壹冊、菊版洋紙摺和裝、生徒用正價金貳拾五錢、教師用正價金參拾錢、各壹冊郵稅金四錢

此書は多年高等學校教授の職に在りて漢文教育の經驗に富める瀧川先生が師範學校中學校上級生徒及補習科生徒の爲に編纂せられたるものにて世間普通の漢文教科書とは大に其面目を異にし序記論說史傳の外に時文翻譯文韻文あり中間には國語國文の翻譯漢字漢語の音義等各種の問題を掲げ以て生徒の練習に供し斬新にして奇辭に流れず用意周而排列序あり近來出色の良教課書となす其教師用には生徒用正文の外贅頭に疑字類句成語故事を掲げ以て講說の用に資せり

## 日露戰役の實驗上り得たる戰術

厚生堂編輯部編纂、全壹冊、四六版洋布表紙上製美本、正價金八拾錢、郵稅金八錢

此書は専ら實地の經驗に基き各兵科從軍將校の意見は勿論、歐米各國戰術大家の評論をも參照し日露戰役の實驗に依り將來改良進歩を促すべき戰術上の事項を秩序的に論述し有益無比、實に近來出色の快文字とす

## 小部隊之戰術

雲外庵君著、全壹冊、菊半截版並製、正價金貳拾錢、郵稅金貳錢

此書は専ら小隊長等の爲に下級幹部指揮官として必要なる戰術の原則及應用法を説く

各兵科操典 照 戰 鬪 術

RS生君著、全壹冊、四六版並製、正價金參拾五錢、郵税金六錢  
此書は戰術原則を詳記し、末に日露戰爭戰術上の所感と題する一篇を添へ、最近戰鬪に於て原則が如何に應用せられたるかを示す

騎 兵 小 戰 術

TT君著、全壹冊、菊半截版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は小部隊騎兵戰術の原則及應用を説く

操典第一部 照 步 兵 戰 術 研 究

狂戰生君著、全壹冊、四六版並製、正價金貳拾五錢、郵税金四錢  
此書は戰術研究の資料に供すべく、步兵操典第二部の條項を逐一的確の例を擧げて讀す

應 用 野 外 要 務 及 戰 鬪

陸軍少將渡邊祺十郎君著、全壹冊、菊半截版並製、正價金貳拾五錢、郵税金四錢  
此書は實地問題に就き野外要務及戰鬪の方法を詳述し、容易に其要領を理解するを得しむ

下 士 野 外 勤 務

北旭生君著、全壹冊、四六半截版並製、正價金拾錢、郵税金貳錢  
此書は下士に必要な野外勤務事項を詳説す

兵 卒 野 外 勤 務

北旭生君著、全壹冊、四六半截版並製、正價金八錢、郵税金貳錢  
此書は兵卒に必要な野外勤務事項を詳説す

步 兵 操 典 研 究

北旭生君著、全壹冊、四六版並製、正價金貳拾五錢、郵税金四錢  
此書は詳に步兵操典の各條項を解釋し、且歐洲列強現行操典及各種戰術書と之を對照す

訂 野 外 演 習 各 個 小 隊 教 練

夢城士君著、全壹冊、四六半截版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は野外演習教育の完全を圖り、著者が教務繁劇の寸暇を以て積年研究の結果を述べ

應 用 野 外 要 務 研 究

RS生君著、全壹冊、四六版並製、正價金四拾錢、郵税金四錢  
此書は著者多年本令の研究に潛心し、綿密の解説を其各條に加へ、以て應用の指針に供す

要 務 令 野 外 勤 務

RS生君著、全壹冊、四六半截版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は野外要務令中、下級幹部に必要な條項を拔萃し、難澁の問題は例を擧げて説明す

騎 兵 野 外 勤 務

杏城蟻骨君著、全壹冊、菊半截版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は騎兵科下士卒の野外勤務事項を記す

步 兵 斥 候 步 哨 勤 務 教 練

厚生堂編輯部增補校訂、全壹冊、四六半截版並製、正價金八錢、郵税金貳錢  
此書は步兵斥候步哨の諸勤務要領を細説す

### 歩兵斥候教育之方法

鶴田君著、全壹冊、菊半截版並製、  
正價金七錢、郵税金貳錢  
此書は歩兵斥候教育に最も必要なる精神教育を主眼とし、其他諸般の教育方法を詳述す

### 傳令勤務教育法案

厚生堂編輯部訂、全壹冊、四六半  
截版並製、正價金五錢、郵税金貳錢  
此書は傳令勤務の要領を部下に教育するに當り、經驗上最も適切な諸方案を詳に説明す

### 小隊長之決心

夢城士君著、全壹冊、四六半截版  
並製、正價金拾五錢、郵税金貳錢  
此書は専ら小隊長の爲に決心の練習法を説き、以下級幹部諸士精神修養の参考に供す

### 隊附下士

夢城士君著、全壹冊、菊半截版並  
製、正價金拾錢、郵税金貳錢  
此書は精神教育を主とし、隊附下士の爲に責務の在る所を明にし、以て其師友たるを期す

### 下士勤務提要

京仙君著、全壹冊、四六版並製、  
正價金拾貳錢、郵税金四錢  
此書は隊附下士をして多端なる服務の要領を容易に知得し勤務に便ならしむべく著す

### 下士上等兵教育

京仙君著、全壹冊、四六版並製、  
正價金拾錢、郵税金四錢  
此書は下士上等兵教育教令に基き、専ら下士上等兵教育の参考に資すべく其方法を述ぶ

### 上等兵候補者教育

北旭牛君著、全壹冊、四六版並製、  
正價金拾錢、郵税金貳錢  
此書は上等兵候補者の教導者たり指揮者たる教員及助手の爲に必要の事項を詳に述ぶ

### 下士上等兵候補者用 軍事學問答

A B 生君著、全壹冊、四六版並製、  
正價金八錢、郵税金貳錢  
此書は操典教範中、下士上等兵候補者に必要の事項を拔萃し問答體として記憶に便す

### 陸軍下士志願者心得

佐倉聯隊區司令部御編纂、全壹冊、  
四六版並製、正價金五錢、郵税金貳錢  
此書は佐倉聯隊區司令部の御編纂にて陸軍下士志願者必要の心得及手續を詳に示さる

### 在郷軍人心得

麻布聯隊區司令部及水戸聯隊區司令部御校閱、全壹冊、四六版並製、  
正價金五錢、郵税金貳錢  
此書は壯丁及在郷軍人の服務すべき心得を示し、第一師管御規定の現行書式手續を附す

### 劍影軍隊事情

夢城士君著、全壹冊、菊半截版並  
製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は軍隊事情を詳説し實益及趣味を兼ね

### 軍制提要

厚生堂編輯部編纂、全壹冊、四六  
版並製、正價金拾錢、郵税金四錢  
此書は帝國陸海軍の編制制度を簡明に記す

陸軍檢察事務要論

法官部部長岸本篤次君著、全壹冊、四六版並製、正價金拾五錢、郵税金四錢、五拾錢、郵税金四錢  
此書は陸軍檢察の法理を説き諸手續を示す

軍人恩給法全書

厚生堂編輯部編纂、全壹冊、四六版並製、正價金拾五錢、郵税金四錢  
此書は恩給扶助等に關する法令を網羅す

軍隊經理要領

KY生君著、全壹冊、四六版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は軍隊經理の法令及手續を詳説し各委員の業務を叙明し帳簿傳票の様式を附載す

軍用文章

笠原保久神代玄兩君著、全貳冊、四六版並製、上卷正價金八錢、郵税金貳錢、下卷正價金貳錢、郵税金四錢  
此書は命令報告通報等の作法及文例を示す

新軍人實用書簡

厚生堂編輯部編纂、全壹冊、四六半截版並製、正價金拾錢、郵税金貳錢  
此書は軍人必要の日用文章の文例を網羅し尙卷首には書簡文に就きての心得を詳述す

訂正軍人文鑑

厚生堂編輯部編纂、全壹冊、四六版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は軍人用尺牘記事論説等の文例を示す

名將祝賀送迎吊祭文集

小林紫軒君著、全壹冊、菊半截版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は名將大家の金玉文章を選みて類集す

公文書式

近衛歩兵第二聯隊御編纂、全壹冊、美濃紙半截和裝並製、正價金拾錢、郵税金貳錢  
此書は公文書作成の方法及現行文例を示す

作戰命令

尙劍生君著、全壹冊、四六版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は單簡明瞭に命令を作製する秘訣を詳述し一々實例を掲げて訂正反復之を解明す

言文軍人文鑑

厚生堂編輯部編纂、全壹冊、四六版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢  
此書は言文一致體にて軍人用の文例を示す

やまもと 櫻

栗原保次郎遠山操兩君著、全壹冊、菊半截版洋布表紙並製、正價金拾錢、郵税金貳錢  
此書は古今名家の和歌百首を撰集し陸軍將卒忠勇義烈の事蹟を引證して之を訓釋す

勤儉國民軍歌

厚生堂編輯部編纂、全壹冊、四六半截版並製、正價金八錢、郵税金貳錢  
此書は最も趣味ある名家の軍歌百餘を集む

帝國軍人讀本

京都帝國大學講師池邊義象君著、全參冊、菊版洋紙摺和裝、各壹冊正價金拾參錢、郵稅四錢、○合本全壹冊、菊版洋布表紙上製美本、正價金七拾錢、郵稅金拾錢

此書第一卷は主として帝國軍人の一身に守るべき心得を叙し第二卷は我國體の尊嚴より史談に移り國家の組織に及び第三卷は世界の大勢より黃白人種競争等の事を説けり

軍事御旗の光

京都帝國大學講師池邊義象君著、全壹冊、菊版並製美本、正價金貳拾五錢、郵稅金四錢

此書は旅順攻圍軍に加り一は譽を負ひて死し一は傷つき歸り更に大事業を起したる二兵士の慷慨談、情あり誠あり文優に事盡く

訂海軍軍人必携

海軍筆記清水金樹君著、全壹冊、四六版並製、正價金拾五錢、郵稅四錢、此書は海軍軍人及志願者必要の件を詳示す

征露海戰史

大畑裕君著、全壹冊、菊版並製美本、正價金五拾錢、郵稅金八錢

此書は龍躍虎奮の絶大偉觀を活かし文は變幻離奇の態を極め事は燃岸顯秘の快を盡す

數學教程解式

富樫參君著、全貳冊、四六版並製、上卷正價金拾四錢、郵稅金貳錢、下卷正價金貳拾壹錢、郵稅金四錢、此書は數學教程の問題を逐一詳細に解説す

兵棋必携

北旭生君著、全壹冊、菊半截版並製、正價金貳拾五錢、郵稅金四錢、此書は兵棋の方法を説明し戰術原則を附す

軍用日清會話

參謀本部編修書記湯原景政君著、全壹冊、四六半截版並製、正價金拾錢、郵稅金貳錢

此書は著者多年清語の研究に潛心し戰役の實際通譯官として渡清し實地經驗上之を著す

海軍下士卒生活講話

海軍筆記清水金樹君著、全壹冊、四六版並製、正價金拾五錢、郵稅四錢、此書は海軍下士卒が日常起居の狀況を記す

基本士工術

近衛工兵大隊御編纂、菊半截版並製、正價金五錢、郵稅金貳錢

基本木工術

近衛工兵大隊御編纂、菊半截版並製、正價金五錢、郵稅金貳錢

此兩書は久しく品切なりしが戰役以來御需用増加し陸續御注文あり依りて再版發賣す

測圖學

陸軍工兵少佐松村法吉君著、全壹冊、四六版並製、正價金拾五錢、郵稅四錢、此書は専ら上等兵候補者が學圖學を調製する指針に供し且測量助手の要務を詳述す



病馬看護學

陸軍獸醫學校御編纂、全壹冊、菊版並製、正價金拾五錢、郵税金貳錢

軍馬別毛及理毛法

陸軍獸醫學校御編纂、全壹冊、四六半截版並製、正價金四錢、郵税金貳錢  
此兩書は陸軍獸醫學校の恩命に依り發賣す

改兵卒教程

全壹冊、正價金貳拾錢、郵税金四錢

改騎兵卒教程

全壹冊、正價金拾八錢、郵税金四錢

徵發馬匹調教心得

陸軍二等軍醫正原八百太郎、陸軍騎兵少佐吉良秀識、陸軍砲兵大尉長瀬龜太郎、陸軍砲兵少尉高落松太郎四君校閱、全壹冊、四六半截版並製、正價金四錢、郵税金貳錢  
此書は戰役の際苦心慘憺其局に當れる著者が經驗の結果を述べ各上官の校閱を経たり

輜重車輛使用法

全壹冊、四六半截版並製、正價金貳拾五錢、郵税金四錢

軍用電報規則  
軍用電報取扱規程  
通信所勤務規程  
草案

全壹冊、菊半截版並製、正價金貳拾錢、郵税金四錢

改野戰砲兵卒教程

全壹冊、正價金拾八錢、郵税金四錢

改要塞砲兵卒教程

全壹冊、正價金拾八錢、郵税金四錢

改工兵卒教程

全壹冊、正價金拾八錢、郵税金四錢

改輪卒教程

全壹冊、正價金拾八錢、郵税金四錢

以上六書(四六版並製)は何れも教育の術に當れる各兵科將校の編纂に係り必要の事項は細大悉く網羅して遺漏なく教育用及兵卒自修用に供し毫も間然する所なき良書を以り

步兵射擊隊行演習教育方案  
附步兵射擊習會表

全貳冊、四六半截版並製、貳冊揃正價金參錢、郵税金貳錢

步兵補充大隊の射擊教育に關する意見各箇戰團射擊隊行教育法

全壹冊、四六半截版並製、正價金四錢、郵税金貳錢

攜帶用寸珍本

寸珍野外要務令 正價金拾參錢 郵税金貳錢

寸珍軍隊內務書 正價金貳拾錢 郵税金貳錢

寸珍陸軍禮式 正價金貳五錢 郵税金貳錢

寸珍劍術教範 正價金貳七錢 郵税金貳錢

研究用大形本

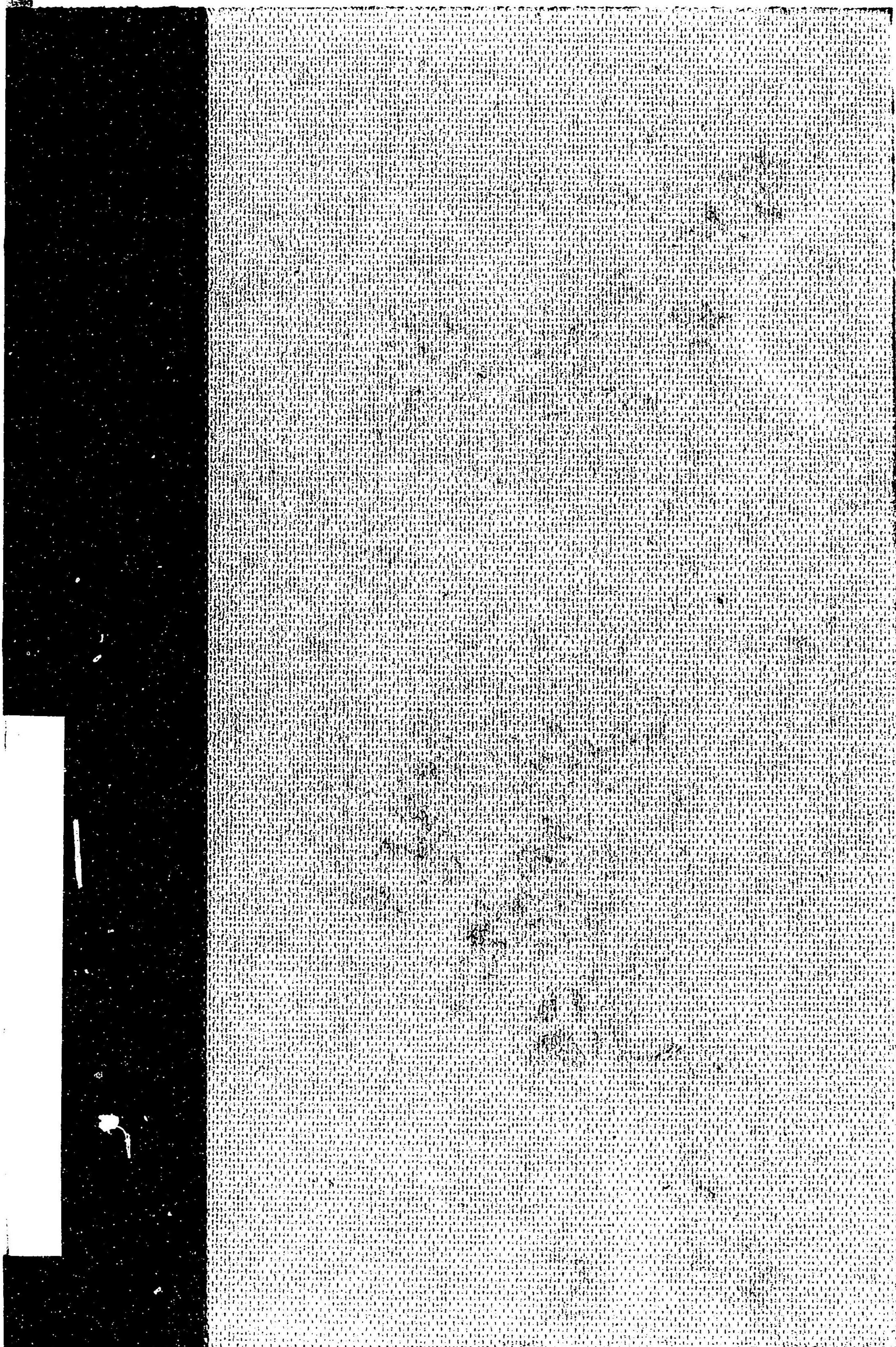
大版野外要務令 正税金参拾  
 大版步兵操典(第二部) 正税金八拾  
 典改正草案(ヲ除ク) 正税金貳拾  
 以上の典令教範は研究用に供し書  
 入自在のため欄外を廣くしたる四  
 六版洋布表紙金文字入の美本なり

○野 外 要 務 令 正税金四拾  
 ○步 兵 操 典 正税金七拾  
 ○步 兵 操 典 假 名 付 正税金八拾  
 ○步 兵 操 典 第 三 部 正税金参拾  
 ○改 正 草 案 (ヲ 除 ク) 正税金貳拾

製本略符 ○菊版 ●四六版 ○菊半截版  
 ○四六半截版 △菊四截版 ×和紙摺和装

寸 珍 體 操 教 範 正税金貳拾  
 寸 珍 步 兵 操 典 正税金貳八  
 寸 珍 步 兵 操 典 (第 二 部) 正税金貳五  
 寸 珍 步 兵 射 擊 教 範 正税金貳拾  
 寸 珍 三 十 年 式 步 兵 正税金貳拾  
 銃 及 騎 銃 保 存 法 正税金貳拾  
 寸 珍 騎 兵 射 擊 教 範 草 案 正税金貳拾  
 寸 珍 馬 術 教 範 第 二 部 正税金貳拾  
 寸 珍 野 戰 築 城 教 範 正税金貳拾  
 寸 珍 工 兵 操 典 草 案 正税金貳拾  
 寸 珍 輜 重 兵 操 典 正税金貳拾

以上之の典令教範は携帶の便を計り  
 細活字を用ひて容積を縮め菊四截  
 版洋布表紙金文字入の小冊子とな  
 し印刷鮮明、装釘堅牢の美本なり



特 69

276

軍人精神教育

国立国会図書館

203759-000-3

特69-276

軍人精神教育

SN生/著

M40

EDN-0006

